**2022年 7月改訂(第5版)
＊ 2017年10月改訂(第4版)
医療機器承認番号 22200BZX00763000

器51　医療用嘴管及び体液誘導管
管理医療機器　換気用補強型気管切開チューブ　35404040

# ラセン入気管切開チューブ

（気管切開ＮＥＯ　固定式）

再使用禁止

**【警告】**

1. 併用医療機器
 1)本品を介して高濃度酸素を投与している場合は、本品の使用部位近傍でレーザーメスや電気メスを原則として使用しないこと。[酸素中では突然発火したり、発火による気道熱傷等のおそれや有毒ガス発生の可能性がある]

2. 使用方法
 1)気管切開術後においては、皮膚から気管へのルートが確立していないため本品の再挿管が困難となる場合があるので、本品が気管切開孔より抜けないようしっかりと固定できるような処置を講じること。
 本品が抜け再挿管する場合、皮下へ異所留置するおそれがあるので、再挿管後に換気状態の確認を十分に行うこと。また、再挿管時、気道が確保できない場合に備えて、緊急気管挿管等の準備を整えておくこと。
＊ 2)患者固有の気管形状により十分な挿管が不可能な（挿管深度が浅い）場合や、通常位置よりも気管切開孔を頭側に造設せざるを得ない場合には、皮下迷入のおそれがあるため、常に患者の換気状態を確認し、換気不能に陥った場合には、皮下迷入を想定して緊急再挿管等の処置を講じること。[本品はチューブの柔軟性が高いため、患者の体動（皮膚切開部と気管切開孔の位置を変化させる頸部反り返り動作等）により、本品が気管切開孔から抜けることなく、留置中のチューブのみが気管内より逸脱し、皮下に迷入する危険性がある]
 3)本品を呼吸器回路等と接続する場合は、乾いた状態で確実に接続されていること（リーク、閉塞、接続が緩いなどの問題がないこと等）を確認すること。[接続が不完全な場合、換気障害等を引き起こすおそれがある]（詳細は**【使用上の注意】**1.重要な基本的注意の1)を参照すること）

**【禁忌・禁止】**

1. 使用方法
 1)再使用禁止

2. 併用医療機器
**1)本品はMR Unsafeであり、MR検査は禁忌とする。[本品は、金属製の部品を使用している]（詳細は**【使用上の注意】**2.相互作用の1)を参照のこと）
 2)内筒を有する麻酔回路(ジャクソンリース)等に接続しないこと。[呼気が吐けなくなることがある]（詳細は**【使用上の注意】**2.相互作用の1)を参照のこと）

**【形状・構造及び原理等】**

1. 本品は、シリコーンゴム製の気管切開チューブである。
2. キンク防止を目的として、チューブ壁内にはステンレス製のラセンが入っている。
3. 挿管時のチューブ補強を目的とした、スタイレットが装着されている。
4. 製造時のウイング固定を目的とした、固定具(図２．参照)が装着されている。
5. コネクタとチューブは、50N(5.1kgf)の引張り強度を有している。

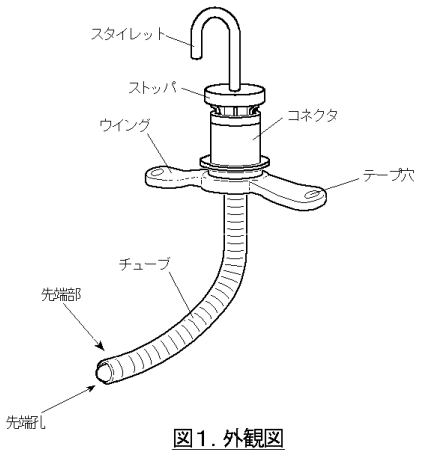



図１．外観図

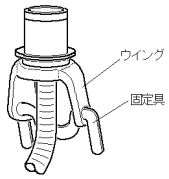



図２．固定具(装着状態)

＜材質＞

| 各部の名称 | 原　材　料 |
|---|---|
| ﾁｭｰﾌﾞ | ｼﾘｺｰﾝｺﾞﾑ及びｽﾃﾝﾚｽ |
| ｳｲﾝｸﾞ | ｼﾘｺｰﾝｺﾞﾑ |

**本品はラテックスフリーである。**

**【使用目的又は効果】**

気管切開孔より気管内に挿管し、気道確保の目的に使用する気管内用のチューブである。

**【使用方法等】**

1. 操作方法
本品はディスポーザブル製品のため、一回限りの使用のみで再使用できない。

2. 一般的使用方法
 1)挿管前の準備
 ①滅菌包装より丁寧に取り出し、破損等がないことを確認する。
 ②ウイングより固定具を取り外す。
 ③スタイレットがチューブより抜去できることを確認した後、チューブ内に再装着する。
 ④コネクタと呼吸器回路等が確実に接続できることを確認する。

 2)挿管方法
 ①常法により気管切開術を行う。
 ②気管切開孔より本品を気管内に挿管する。
 ③本品が正しい位置に挿管されていることを確認した後、コネクタに呼吸器回路等を接続する。
 ④ウイングと皮膚の間にガーゼ等を挿入し、綿テープをウイングのテープ穴に通して本品を患者の頸部に固定する。

3)挿管後のケア
チューブ閉塞の有無、挿管や固定状態、コネクタと呼吸器回路等の接続状態を定期的に確認する。

3.使用方法等に関連する使用上の注意
1)一般的事項
①使用前に､ウイングより固定具を丁寧に取り外し､廃棄すること。[製造時に必要とした部品で、挿管後は使用しない]
②チューブに施されている目盛りマーキングで、挿管深度を決定しないこと。[目盛りマーキングは、挿管深度の単なる目安である]
③挿管する際は、チューブ先端部に潤滑剤等の薬剤を塗布すること。[塗布せずに挿管すると、気管切開孔及び気管損傷等の原因となる]
④チューブの先端孔には潤滑剤等の薬剤を塗布しないこと。[チューブ内腔が閉塞する危険性がある]
⑤挿管は慎重に行うこと。[無理な挿管は、チューブのキンク、気管損傷等の原因となる]
⑥挿管状態を常に確認すること。[分泌物によるチューブ閉塞や、固定不良による自然抜去の危険性がある]

2)スタイレットに関する事項
①附属のスタイレット以外は使用しないこと。
②使用前に､スタイレットの抜去が可能なことを確認した後、チューブ内に再セットすること。
③再セット後、スタイレットの先端位置を確認すること。
④スタイレットの先端位置が、臨床上適切でないと判断される場合は、スタイレットのストッパにより調節すること。
⑤挿管は、コネクタとスタイレットのストッパを持って行うこと。[スタイレットのみを持って挿管すると、挿管中にスタイレットが突出し、気管損傷等の原因となる]
⑥挿管後は速やかに抜去し、廃棄すること。

**【使用上の注意】**
1.重要な基本的注意
1)使用中は呼吸器回路等との接続状態を常に確認すること。[再接続、体位変換、激しい咳嗽等により、接続部が外れることがある。]
2)附属の綿テープ以外の頸部固定具(ベルクロ(マジックテープ)をウイングのテープ穴に直接掛けるホルダ等)を使用する場合は、常にテープ穴が損傷していないことを確認すること。[ベルクロ等で損傷したまま継続使用すると、テープ穴破断により、チューブが気管切開孔より逸脱する危険性がある]
3)チューブ内の分泌物は、定期的に吸引すること。[吸引により閉塞が解除できない場合は､新しい製品に交換すること]
4)本品を使用する際は、警報装置付きのパルスオキシメータやカプノメータで、常に患者をモニターすること。

2.相互作用(他の医薬品・医療機器等との併用に関すること)
1)併用禁忌(併用しないこと)

| 医療機器の名称等 | 臨床症状・措置方法 | 機序・危険因子 |
|---|---|---|
| 磁気共鳴画像診断装置(MRI) | MRI装置による検査は行わないこと。 | 金属部品の発熱、検査画像に乱れ(アーチファクト)が発生する。 |
| 内筒を有する麻酔回路(ジャクソンリース) | 接続しないこと。 | 本品を閉塞させ、呼気が吐けなくなる。 |

2)併用注意(併用に注意すること)
①本品を介して高濃度酸素を投与している場合は、本品の使用部位付近でレーザ治療器(レーザーメス)や電気手術器(電気メス)を原則として使用しないこと。[酸素中でレーザ治療器や電気手術器を使用すると、突然発火したり、発火により気道熱傷等のおそれや有毒ガス発生のおそれがある]

3.不具合・有害事象
本品の使用に際し、以下のような不具合・有害事象が生じる可能性がある。

1)重大な不具合
・分泌物、挿管時に用いた潤滑剤等によるチューブ閉塞
・キンクによるチューブ閉塞

2)重大な有害事象
・換気不全
・気管後壁損傷
・分泌物、潤滑剤等のチューブ閉塞による換気不全
・チューブのキンクによる換気不全
・皮下気腫、縦隔気腫、気胸
・無気肺
・反回神経麻痺
・気管損傷、気管壁壊死、気管食道瘻、気管腕頭動脈瘻、気管無名動脈瘻
・気管肉芽形成、気管狭窄、抜管困難症
・肺炎、気管支炎
・誤嚥による肺炎

**【保管方法及び有効期間等】**
1.保管方法
水濡れに注意し、高温、多湿な場所及び直射日光を避けて、清潔な状態で保管すること。

2.有効期間
使用期限は製品ラベルに記載。[自己認証(当社データ)による]

**【製造販売業者及び製造業者の氏名又は名称等】**
製造販売元　富士システムズ株式会社
TEL 03-5689-1927